(1) 入園期における保育の観察と記録の収集を行った。東京都の保育所（0歳児クラス2園、1歳児クラス1園）において、対象児1名を中心に観察とVTR記録を行った。期間はA保育園11カ月男児（2002年4月2日から5月7日の間の10日間）、B保育園11カ月男児（3月29日から17日の5日間）、H保育園1歳3カ月女児（4月1日から19日の7日間）である。保育園、H保育園は調査協力者に記録を依頼した。また観察事例が少ないため、今後も記録を継続して行う予定である。

(2) 東京都、千葉県、埼玉県、茨城県の69園（公立44園、私立25園）に対する質問紙調査の分析を行い、0歳児保育の現状を明らかにした。10歳児クラスの子どもの実数は5名～29名、担当する保育者は2名～5名と幅があり、埼玉・千葉・茨城で子ども・保育士の数が多かった。0歳児定員を定めている43園中9園、園全体の定員では38園が定員を越える受け入れを行っていた。正規職員と正規以外の職員で保育を行っている園が32園、埼玉・千葉・茨城の公立で顕著であった。正規1名＋正規以外3名、正規2名＋正規以外4名など、正規以外の保育者の数が正規の保育者の数を上回っている園が10園あった。これらの結果については日本保育学会第56回大会（2003年5月）において発表した。

造成地20年後の植生とアリ相の遷移

近藤正樹

遷移学説にもとづく実証的研究は火山起業（乾性系列）や沼起業（水性系列）の植生に多い。しかし、土壌の利用（開発）による造成地からの遷移は研究されていない。北海道市八幡西区に造成された産業医科大学の校地を調査する機会を得、造成直後、10年後の植生とアリ相を調査してきた。このたびは20年後の調査に当たる。

常緑広葉樹植の萌芽林であった二次林は下草がなくなり自然林に近くなり、落葉がふえ、アリ相も北斜面ではヒメオオアリが顕著になった。陸上競技グランドではイネ科の草が侵入し、トビイロシワアリが定住し始めている。植え込みでは苗木の上部が消え、芝地、草花がトビイロシワアリを欠いている。その結果アマエイロアリ・オオアリ・ヤマトアシナガアリを中心にしたアリ相にまとまってきた。

なお、この研究成果は、産業医科大学の紀要に投稿の予定である。

遠隔授業の進め方と効果に関する研究

金子尚弘

遠隔授業を実施するために通信衛星を用いる方法がある。本研究の一環として、広島国際学院大